

受け取った言葉

は  
れ  
の  
そ  
ら

人  
物

タクト様 (22) 大学生・皇太子

江崎徹 (64) 大学教授

○日ノ本大学・全景 夏

外観が古びた大学の本講堂が建っている。  
いる。

本講堂の右側に築年数の新しい第二講堂が建っている。

第二講堂の奥に、年代物の第三講堂が建っている。

アブラゼミの鳴き声が聞こえ、たくさんの学生達が本講堂・キャンパス内を移動している。キャンパス内の日差し

が強く、学生達は早足で近くの講堂や  
大学出口に向かう。

○ 同 ・ 駐 車 場

本講堂が裏手に見える立地にある駐  
車場付近で数名の警備員・近衛兵達が  
待機したり警らをしている。

警備員の一人が腕時計で時間を確認  
する。時計には『11:30』になっている。

警備員の額から汗が出て、表情を変え

ずにハンカチでぬぐう。

○ 同・本講堂入口掲示板

本講堂入口付近に大きな掲示板があり、赤字で太く『令和 一〇 年度皇太子タクト様、当学文学部第一文学科にてご勉強中。本日受講日により、特別体制を取っているので、在校生は用のある者以外外出』と記載されている。

○日ノ本大本講堂3階・教室前廊下

⇒シャツジーンズ姿のタクト様(22)

がゆつくりした歩行で∞階奥にある教

室へ向かう。

手元には深い茶の高級カバンがある。

○同・教室内

タクトは教室のドアを開く。

教室には江崎徹(66)が床にマットを敷

いてうつ伏せになりながら携帯ゲー

ム機で遊んでおり、側にカバンが置かれて  
れている。

江崎はドアの音に反応する。

江崎「タクト君、こんにちはっ！もう少し待  
ってて。それとも、」

と、江崎はビジネスカバンを物色し、  
もう一台のゲーム機をタクト様へ見  
せる。

タクト「……え、え、江崎教授。僕は本を」  
江崎「結構インスタレーション湧くんだけ

な。わかった、ジャンジャン読んじゃお

うか！」

タクト「あ、ありがとうございます」

と、タクト様はカバンから黄ばんだ文

庫本を取り出す。本の中に挿入された

黄色いアイリスの押し花の葉を抜き

取り、読書が始める。

しばらく、二人は思い思いの時間を過

ごす。

×

×

×



江崎はゲーム機に内蔵された時刻機能

から『12時45分』に気づき、ゲーム

を止める。

江崎「タクト君」

タクト「……」

と、タクトは読書を止めようとする。

江崎「いいんだ、そのまま」

タクト「は、はい」

江崎「君が私の講義を取ってから四か月にな

るのか……めでたいっ！笑いたまえ！」

と、タクトは読書を止める。

タクト「ほ、本当に、い、いいのでしょうか？」

江崎「いいとは……とは？」

タクト「こ、講義と言いつつ、好きな本をよ、

読むだけの……講義」

江崎「はっはっ！バレなきやいいんだ！今は

好きな本を読めてるんだろ？」

タクト「は、はい」

江崎「ならいい」

と、10時を告げるチャイムが鳴る。

江崎「またおいで」

○日ノ本大学・全景

沢山の紅葉が大学の路面へ落葉して  
いる。厚着の学生達が本講堂・キャン  
パス内を移動している。

○日ノ本大本講堂3階・教室内

教室内でタクトが古びた本を読みなが  
ら、傍らに真新しい文庫本・ノートPC

が置かれている。

タクトは時折、本で読んだ内容をPC

の文書ファイルに打ち込んでいる。P

Cへ打ちこむ前に、秋桜の押し花の葉

で本の中に挟む。

江崎は携帯ゲームをしている。

江崎は携帯ゲームを止め、上着の内ポ

ケットからスマホを取り出す。

スマホのホーム画面には、『12..50

』と表記がされている。

江崎 「タクト君！」

タクト 「え……もう」

江崎 「あっはっは！夢中になっててよろし

い！文献、結構古いやつだね……」

タクト 「こ、これは……」

江崎 「全然構わないよ。この講義は、課題提

出ないから……まあ詩作したいなら私は止

めないがね！」

タクト 「……」

と、タクトは歯ぎしりを始める。

江崎「文献、見覚えあるよ。アイツの」

タクト「き、教授と同級生の……父のです」

江崎「あっ！前にカビ生えてそうな黄ばんだ

文庫本持って来ていたけど……それも」

タクト「……」

江崎「血は争えないのかな！あっはっは！」

タクト「ち、違いますっ！」

と、タクトは取り乱して大声を出す。

江崎はタクトの様子を見て、微笑む。

「3時を告げるチャイムが鳴る。

江崎「またおいで」

○日ノ本大学・全景

枯れ木に雪が降り積もっている。大学の路面は歩行路以外雪が積もっている。

少数の防寒着姿の生徒達が路面へ滑らないように、ゆっくり移動している。

○日ノ本学大本講堂3階・教室内

教室内でタクトがノートPCへ文書を打ち込んでいる。傍らに置かれた文献にはたくさんの付箋が貼られている。山茶花の押し花の葉が本の中段に挟まれている。

江崎は音量を上げて、携帯ゲームをしている。

タクトは何回も首を振っていたが、PCをスリープモードにし、江崎の前に向かう。



タクト「き、教授」

江崎「なんだい？」

タクト「そ、その……げ、ゲームの」

江崎「ごめん、声小さくて全然わからん！」

と、江崎はゲーム機の音量を上げる。

タクト「教授！！」

江崎「声も聞こえないし……なら問題ない！」

タクト「あ、あ、ありますっ！」

江崎「だからなんだい？こっちの勝手だろ？」

タクト「問題しかない！音を下げろと言っる

るんだ！」

と、タクトは江崎に詰め寄り、ゲーム機を取り上げる。

江崎「おい、返したまえ！」

タクト「僕の話聞け！あんたのゲームの音

量がデカイ！同じゲームを何回も何回も何

回も……とにかくうるいんだよっ！」

江崎「それは私の趣味だからなあ！」

タクト「だったら、悪趣味だ！人の気も知ら

ないくせに。馬鹿にしゃがって！僕がども

りひどいの知ってるだろ」

と、江崎はタクトへグッと詰め寄り、

タクトの耳元で怒鳴る。

江崎「そちらこそ、私の専門の一つが吃音の

矯正なにご存じのはず！」

タクト「わっ！」

江崎「いい声だ！ところで、タクト君。今ど

もりなかっただろう？」

タクト「……」

江崎「その気持ちを……書くんだ。それがい

い！時間まで頑張るんだ！」

○日ノ本大学・全景

桜が咲き誇り、スーツ姿・晴れ着姿の学生達が大学の外へ向かっていく。

○日ノ本学大本講堂3階・教室内

江崎は携帯ゲームを傍らに置き、膨大な資料を元にレポートを作成している。  
ドアにノック音が聞こえ、煌びやかな

服装をしたタクトが入室する。タクトの右手に少し汚れたカバンを持って  
いる。

江崎「ご卒業おめでとうございます、タクト様」

タクト「ありがとうございます。教授！」

と、タクトはカバンから一冊の小冊子を取り出し、江崎へ渡す。

タクト「植物詩の小冊子：自作です」

江崎「頑張ったな！！君には大変無礼を働い

たよ……時代が時代なら……」

タクト「ゲームばっかの不埒者でしたね……」

あの時間がなかったら……植物の素晴らし

さがきつと……わからなかった。では、」

と、江崎が遮るように話す。

江崎「いってらっしゃい。またおいで」

タクトはしばらく棒立ちし、ハンカチ

で涙を拭っている。鼻水垂れ流しながら

ら、笑っている。